

ぎふの日本画 いのちのリレー

2020年12月18日|金| — 2021年2月28日|日|

土屋禮一を中心に



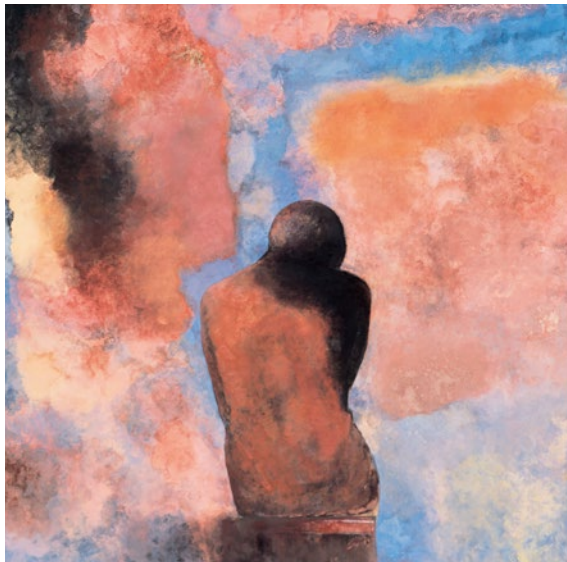
展覧会に寄せて 描くこと、「いのち」の本質

何年も前になるのだが、アルタミラ洞窟壁画が見事に再現されたその洞窟に入ったことがある。足場の悪い薄明かりの中を歩くのだが、凹凸の岩肌を活かし描かれたバイソンや馬、この臨場感はどうな印刷物でも伝わらないだろう。かつてその時代の人達は、この暗闇の中、松明クイマツの明かりを頼りにこの壁画を観、その揺れる光の奥から現われる動物の命は、実物を越へ、輝きに満ちていたことだろう。表現の原点はこの空間なのだと感じ入ったものです。

今や壁画は外気から完全に閉ざされ非公開であるが、叶うなら本当の洞窟に入りたいものです。

土屋禮一

1946年、土屋輝雄の長男として養老郡養老町に生まれる。武蔵野美術大学を卒業後、日展を中心に活躍する。本作では作家が夢で見たままに、裸婦が背を向けている光景を描いている。禮一にとって雲は幼い頃より想像力と感情を広げてくれる友達であり、画家による個人の視点を乗り越え、鑑賞者に懐かしさや詩情を抱かせてくれる。



土屋禮一
雲 1995年

作家の言葉

西にそびえる養老の山の上半分は、赤く赤く日の光を浴びて南洋のような濃い緑がきれいに日の光と落ち合って、なんとも云へぬ気持ちのよい筆には現はすことのできない自然の色をあらはして、天地の大なる自然の有様をうかべている。こうしていつもいつもチャームされる朝の自然の景色は病床からのながめを毎日かはらぬ同じものにする。自分はさみしく病の床でいつもいつもこうした一年間をかかはらぬ生活をしてきている。自然はある暖かみを僕に日一日とあたえてくれる。今日も相かはらず十六日がひらけていこうとしている。

(土屋輝雄『病床日記』1924年2月16日より)

1909年、養老町に生まれる。14歳の時、雪の路での転倒が原因で股関節炎になり、20年近い闘病生活を送る。病床で昆虫や鳥を細密に写生し続け、後年は川端龍子が主宰する青龍社展に出品。本作は松葉杖で立てるようになった後、得意とした花鳥から新境地を求めた晩年の作品であり、自然の命を情趣豊かに表現している。1962年、52才で逝去。



土屋輝雄
朝 1957年

作家の言葉

絵に正直になることはむづかしい、それは自分自身に正直になることだから。

素直に自己を表現することは、生^{なま}やさしいことではない。その道を究めてこそ、花の命が描ける。花は散る故に美しい。その花の命を私達は描かねばならないのだ。

42年5月24日夜

加藤栄三

(『加藤栄三遺作展』岐阜日日新聞、1974年より)

1906年、岐阜市に生まれる。東京美術学校を卒業後、創造美術展や日展に出品。祭りや風景、生物など、時とともに変化する情景を写生する際は、周囲が圧倒されるほどの迫力でその本質を描いた。本作は宮城県鞍掛島への写生の旅で、乱舞するウミネコを見上げ、瞬間的に抱いた強い印象を大胆に構成した代表作。1972年、65才で逝去。



加藤栄三
空 1958年

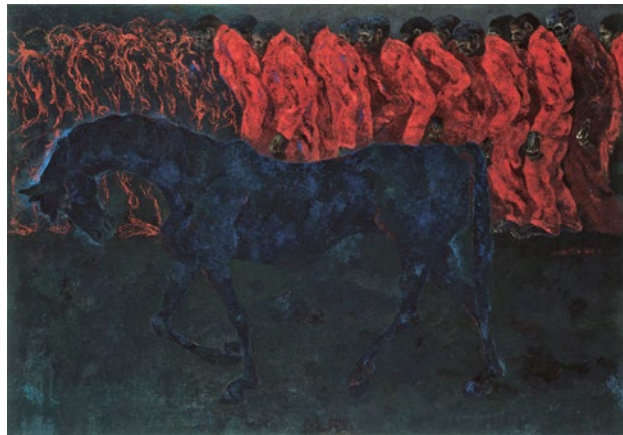
作家の言葉

〔兄・栄三との作品の違いを尋ねられて〕

兄貴は開放的だし、私は内側をみつめるようなところ。これは偶然なんだけど、兄貴が死ぬちょっと前に、死んだ馬の傍で人物が立っている、まあ自画像なんだけれど描こうと思って。その時に死というものをふと考えてね。死というのは一体何だろうということでも描き始めたんですよ。その翌年兄貴が亡くなって。ただ、意識するしないは別として、兄貴の死を契機として僕は、死とはどういうことか、また生きるとはどういうことなのかをより見つめるようになったことは本当だね。

（「座談会一憶い出すままに」『加藤栄三—その人と芸術—』
山種美術館、1992年より）

1916年、岐阜市に生まれる。東京美術学校を卒業後、日展を中心に発表する。構成を重視した風景から出発するが、兄の死後、生命の深淵を見つめるようになる。骸骨が混じる人々とやせ細った馬が共に行進する本作では、死、および生が持つ業を描いた。晩年は情念を込めた炎や水墨で描いた大木など、対象の存在を表現し続けた。1996年、80才で逝去。



加藤東一
ある行進 1974年

白映に赤 作品に表現された「いのち」

重ねる服の数が一枚増える頃、津屋川は岸を緑から赤へと染め変えそれまでの印象とは全く違った様相を見せてくれる。高い空を映す水面が何という事も無くゆったり揺らぎ続ける。水際の草はそんな中柔らかな風と共に映る姿を少しだけ変えた。

大きく変わる色や形も、又変わらず有るものも、皆一つの景色の中に存在している。それ等の全てを受け入れて私という人間がここに在るのだという気持ちを作品に留めたく、肌に少し寒さを感じながら写生をする。正に生を写す、といったところか。

長谷川喜久

1964年、岐阜市に生まれる。金沢美術工芸大学大学院修了。寓意を示す人物や動物、緻密な風景を描き、日展中心に活躍する。実際の写生場所で感じた温度や湿度、時間の経過など、質感や存在を表現したいと作家は話す。本作タイトルに含まれる「白」とは、光や反射光ではなく、光を持っている存在そのものを意味している。



長谷川喜久
白映に赤 2018年
2020年度新収蔵作品

業 作品に表現された「いのち」

「いのち」と向き合うという深刻な課題が、人々の心の底に忍び寄ってきているように思います。日本画は、古くから人間だけでなく、広く自然、動物等を題材に、そこに息づく「いのち」を私達がどのように捉えたかを表現する課題に取り組んできました。そんな時、この《業》を描いた時のモチーフを思い出します。全ての生き物は、他のいのちとの連鎖によって、いのちをつないでいる。その生きる物全てにある逃れられない運命が具現化されているような印象を受け、祈りにも似た気持ちで描きました。自然な物に目を向けるとただひたすらそこに在り続ける姿に何か生きることへの根源のようなものを感じます。

林 真

1972年、土岐市に生まれる。名古屋芸術大学大学院修了。在学中より日展を中心に発表する。近年の出品作では生命をテーマに、風景や生物を精緻な描写で捉える。笹百合など、花の生命を清澄に描く一方、蟹を捕獲する大きな蛸を描いた本作のように、食物連鎖や不穏な存在感を生物の姿で表現することを得意とする。



林 真
業
2013年

ぎふの日本画 いのちのリレー

令和元(2019)年の大嘗祭で《主基地方風俗歌屏風》に京都府の四季を描いた土屋禮一。彼の父・輝雄にとって、病床の中で全ての意識を集中して身近な動物を描くことは、痛みを和らげてくれる、生きるための手段でした。禮一が16才の時、画家としての夢を息子に託し、輝雄は世を去ります。

武蔵野美術大学在学中、出身地の縁で加藤栄三・東一に出会います。人を惹きつける迫力で動くものの瞬間を捉えようとした栄三、人間とは何かという大命題を追い続けた東一、本質的に異なる画家たちの姿を見ます。

劣等感や鬱々とした感情を見続けた初期、栄三から「下ばかりでなく、上を見るといい」と声をかけられます。転機となったのは《道》でした。画面左上に垣間見える空の部分が中々描けず苦戦していた時、ふと電車の窓から広がる明るい空を見ると、微動だにしない雲が漂っている。この時、自分が求める空の姿を見たといいます。足元を深く掘って水脈に行き当たるように、内面を追求した先に理想の美へと行きついた瞬間でした。

彼は評論家の田中日佐夫の言葉を借りて「生まれる前の子宮の中なんか暗かったんだよねえ。だから暗い中から明るい世界へ何度も行くのが

生きるってということなんだよ様」と死生観を語っています。内から外へ、自分を越えたいのちの理想へと行きつくことは、禮一にとって生きること、表現そのものと言えるでしょう。

彼はまた、自然の中には誰にも共通する「なつかしき」があり、描く行為を通じて自分の中の「なつかしき」に出会っているといいます。彼の描く雲や風景をどこか懐かしく感じるのは、画家が追求めた理想の美が個人の表現を越え、鑑賞者の内にある感情や理想と呼応しあうからではないでしょうか。描くこと、感じるこそ「いのち」の鼓動とすれば、画家と鑑賞者の「いのち」の接点が作品の画面上にあるといえます。対象を捉えるための写生は世代を超え、長谷川喜久、林真ら次代の日本画家たちにも受け継がれていますが、画面の表現方法は時代によって変化しています。次の時代、画家と私たちは内と外の世界をどのように旅することになるのでしょうか。

(岐阜県美術館学芸員 芝 涼香)



父・輝雄の剥製と一緒に(7才の禮一)



土屋禮一 道 1979年



新型コロナウイルス感染症対策のため、会期・内容を変更する場合があります。
最新情報は岐阜県美術館webサイトをご覧ください。

<https://kenbi.pref.gifu.lg.jp/>

表紙: 土屋禮一
桜樹 2008年